

巻頭言

名古屋学芸大学健康・栄養研究所
所長 井澤 一郎

今年も世界の様々な地域で戦争や紛争などが続いており、騒々しい1年でした。国内では、人間社会および自然環境の両面での変化が原因とされるクマによる人身被害が増え、自然との共生のあり方を考えさせられました。一方、良いニュースとしては、2025年のノーベル賞を2人の日本人が受賞されるという快挙がありましたが、生理学・医学賞を受賞された坂口先生が、ひとつひとつ、よく考えることが大切であると言われていたのが印象に残りました。

そのような中、本年も健康・栄養研究所年報（第17号）を無事に発刊することができました。健康・栄養研究所の研究や実践活動の成果を論文として公表し、その成果を広く社会の皆様にお伝えできるよう年報の発刊を続けています。2009年より、本誌は医学中央雑誌データベースに定期刊行物として収載され、医中誌 Web でも検索できるようになっております。第17号では、原著2編、報告3編の計5編の論文を掲載しています。

原著論文のうち、「A 県内の子ども食堂におけるヤングケアラーへのかかわりに関する研究」では、最近問題が明るみに出てきたヤングケアラー等の子どもに対する支援のあり方を子ども食堂における調査から検討されています。また、「栄養教諭の所属形態別にみる食に関する指導の全体計画の現状」では、栄養教諭が中心となって策定する食に関する指導の全体計画について、本務校と兼務校に分けて分析し、今後の効果的な食育推進のための課題を抽出しています。また、3報の報告のうち、「日進市における健康状態不明高齢者に対する栄養ケアプロセスに基づく栄養介入」では、健康状態が把握されていない日進市に在住する高齢者を対象に、低栄養あるいはフレイルの危険がある方に対して栄養ケアプロセスに基づく栄養介入を実施した実践活動の評価・検討が行われ、「2025年度 食の安全・安心タウンミーティング」報告」および「2025年度 HACCP の考え方に基づいた衛生管理の実践」研修報告」では、研究所が携わらせていただいている研修会の内容と成果が詳しく述べられています。

健康・栄養研究所は、2004年に、「人の健康と栄養に関する基礎研究を行うとともに、保健および栄養学の実践的展開を図ること」を目的として設立されました。以後、周辺自治体・病院・保健所・福祉施設・事業所・企業・ボランティア団体などの関係者の皆様、そして、周辺住民の皆様からの多大なご助力に支えられて活動を続けてまいりました。今後さらに研鑽を積み、研究や実践活動の内容を拡充・進展させていきたいと思っております。